『アビダルマディーパ』の認識論
――眼見説の妥当性――

那　須　円　照

本発表では，『アビダルマディーパ』(ADV.pp. 31-33) において，イーシュヴァラが，眼見説を主張し，他学派の様々な視覚理論の矛盾点を指摘していくという内容を検討した。

ここで批判される視覚理論は，(1)経量部や譬喩者の識根無作用和合見説と，(2)五根和合見説と，(3)眼識見説と，(4)慧見説であり，それに付随する種々の問題も論じられる。

(2)は，五根の同時認識の不可能性によって否定される。(3)は，眼識が見れば，それを知る者がないことになるし，眼識には抵触がないのに遮られたものが見えないことが説明できないことにより否定される。(4)は，慧は耳識等がはたらく時にも付随するが，そのときも見ることになるというおかしなことになると否定される。(1)については，眼根には「見る」という作用があるとされ，視覚無作用説は否定される。

イーシュヴァラの立場が論理的に必ずしも合理的とは言いがたい側面もあるが，彼がいかに有部の立場を守って議論を打ち立てたかを明らかにしたい。

彼は，視覚の際に，眼根と色境と眼識が光等を伴って同時に生じて同時にはたらき，眼根が見るはたらきをなし，眼識が知るはたらきをなす。眼根は見るというはたらきについて，他の諸縁よりも勝れたはたらきをするから，「眼が見る」と説かれる。眼が見て，眼識が知って，それを後で，意識が記憶するのである。眼根には自性と作用があり，自性はすでに完成しているが，作用は見るときに完成するのである。

有部のこの立場は，同時因果を認めることに基づく。しかし，あるダルマが生じるときとはたらくときは同時とは言えず，異時なら刹那滅論に抵触するという問題が生じるが，『アビダルマディーパ』では因果の同時性に基づく問題点は全く考慮されていない。

イーシュヴァラは根・境・識の同時和合の有部の伝統的認識論を堅持している。

(龍谷大学仏教文化研究所客員研究員)